東京都立埋蔵文化財調査センター　平成26年度企画展示

古代びとの祈りとマツリ

展示解説シート①　縄文時代

● 中央展示　マツリの情景

特別な祈りの場で、冬至の日没時に行われた祈りの情景です。平らな石を敷き並べ、棒状の大石を立てて造った祭壇①の正面には、ひときわ高い三角形の山が聳え、その尖った頂に冬至の夕日が今まさに沈もうとしています②。ムラの大切な祭具である断面三角形の土製品（三角柱状土製品）③を石の上に載せ、ままごと道具のような小さな土器(ミニチュア土器)④を供えています。

死と再生の循環は自然界の摂理であり豊饒の根源であると考えた縄文人は、太陽の運行における冬至の落日を、自然界最大の死と再生のイベントとして捉え、太陽と全てのものの「死と再生」を祈ったのです。

町田市
多摩ニュータウン
No.939遺跡出土
土鈴形土偶

日本各地で発見された土偶は、15,000点にのぼりますが、鈴の機能を併せ持った土偶は極めて少なく、鳴子が体内に残るものとなるとごくわずかです。多摩ニュータウンNo.939遺跡出土土偶の大きく膨らんだ腹部は、今にも産まれそうな生命が宿っていることを直感させます。そして、楢原遺跡出土土偶の笑顔のなんと慈愛に満ちて優しいこと！

こうした母親の愛情を感じさせる土鈴形土偶は、子孫繁栄や出産の無事を祈る儀礼の中で、静寂な空間に響く聖なる音を演出したことでしょう。

縄文時代の祭祀とは？

1万年以上続いた縄文時代の祭祀の根幹は、自然界の全てが祈りの対象であり、万物が滞ることなく循環し、「死と再生」を繰り返すことで、豊かな実りがもたらされ、子孫の代まで繁栄できるとの考えでした。

縄文時代というと、狩猟･採集によるシンプルな社会生活を想像するかもしれませんが、複雑な集団関係を持つ高度に組織化された社会であったと考えられています。家族生活を円滑に行い、他の集団との調整を図るためにも、また、病気や怪我、自然災害に対処するためにも、マツリ（呪術や儀礼、祭祀）は欠くことのできないものでした。その際に必要な道具として、土偶や石棒、土鈴などが作られました。

マツリは、家族や集団、集落を中心としたもので、中期末葉～後期を境に、周辺の集落が共同して執り行うものへと大きく変化したと考えられています。

八王子市楢原遺跡出土
土鈴形土偶
（八王子市郷土資料館蔵）

古代びとの 祈りとマツリ

縄文時代

● 展示ケース１　自然に祈る

四季に恵まれた日本ですが、自然は時として過酷です。植物質食料の採集を中心に狩猟、漁労を行う縄文人にとって、食料の安定確保は最も重要な課題でした。そこで、豊かな実りと獲物がたくさん獲れることを願い、自然に祈りを捧げました。

自然界の全てのモノに霊が存在するとの考えから、動物や種実などを象ったモノが、祈りの道具として作られました。なかでも、脱皮を繰り返し成長するヘビは、死と再生の象徴であると共に頭部の形状から男性の象徴として、イノシシは、多産で生命力の強さを備えた母性の象徴として作られることが多かったようです。

また、狩猟の様子を描いた土器で調理した食物をカミとムラビトが分け合って食べた後、土器を壊して葬る行為や、大切な弓を折り、その上にイノシシの骨を重ね置く狩猟儀礼が、狩りの成功祈願や感謝の祈りとして行われました。

折られた弓とイノシシ下顎骨
東村山市下宅部遺跡出土
（写真：東村山ふるさと歴史館）

腹部に乳首を表現した
イノシシ形土製品
八王子市南八王子地区№17遺跡出土
（八王子市郷土資料館蔵）

● 展示ケース２　死と再生

縄文人の精神世界のベースは、「死と再生」です。死は忌むべきものではなく、必ず再生へと繋がり、再生は豊饒へと繋がるという再生観念に基づくものでした。

そうした儀礼に用いられたのが、土偶や人面装飾付土器、石棒などです。火を媒介とする儀礼によって、女神の力を宿した土偶や人面装飾付土器を壊し葬ることで、生命の復活とムラの甦りを祈ったのです。住居を棄てる際にも、土屋に火を放ち、祈りを捧げました。男性の象徴である石棒も、火に焼かれ、壊されたものが多く、土偶と共通しています。

しかし、全てが一様に壊されたのではなく、壊されずに葬られたものもありました。願いが一つではないように、祈りの形や使われ方も様々であったことを物語っています。

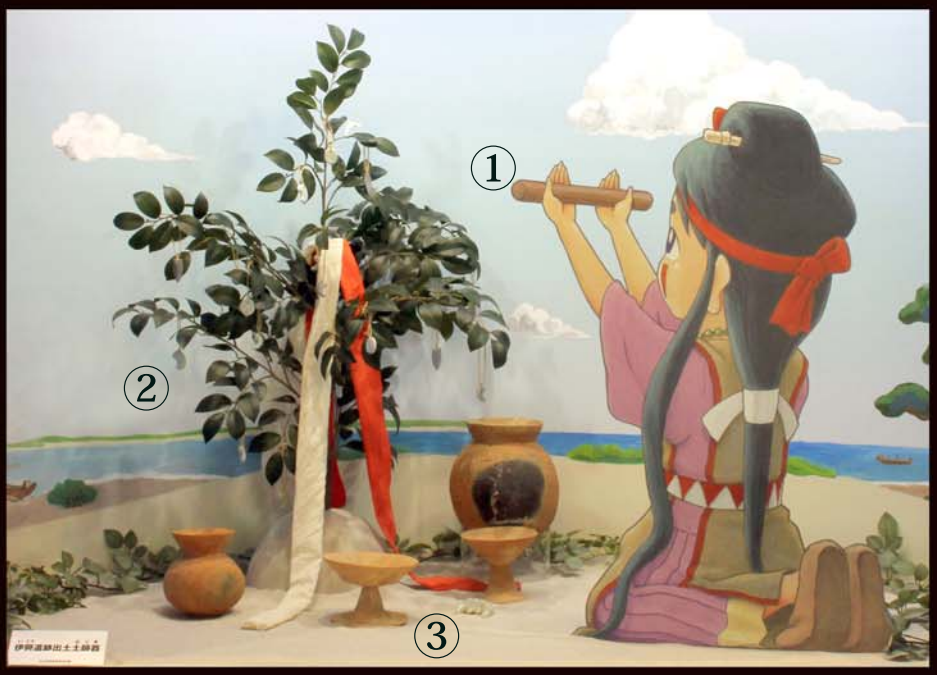
頭と胴が離れて出土した土鈴形土偶
八王子市楢原遺跡出土
（写真：國學院大學博物館）

東京都立埋蔵文化財調査センター　平成26年度企画展示

展示解説シート②　古墳時代

古代びとの祈りとマツリ

● 中央展示　マツリの情景



巫女が、河辺でカミ様に祈りを奉げている情景です。両手には、先祖代々伝わる刀①が握られています。カミ様をお招きするために、榊の枝には様々な器物をかたどった石製模造品②を吊り下げて、目立つようにしました。

木のかたわらには、お酒や食べ物を入れた土器③をお供えしました。この時代、東京低地に住む人々は、河川の氾濫や洪水が起こらないように、日々、神マツリを行い、その後はお供え物を惜しげもなく穴に埋めたり、棄てていたようです。

足立区伊興遺跡出土土師器
（足立区教育委員会蔵）

足立区伊興遺跡出土
石製模造品
（足立区教育委員会蔵）

［三種の神器］

大昔から、皇位継承の重要な宝物とされていたもので「ヤタノ鏡」・「クサナギノ剣」・「ヤサカニノ勾玉」の三種をさします。

古代の神マツリにおいても、鏡・剣・玉は盛んに用いられました。

石で作られた模造品と本物の勾玉や鏡の形をくらべてみよう！

古墳時代の祭祀とは？

3世紀から7世紀にかけて、日本列島では,北東北地方と南九州の鹿児島・沖縄を除く地域に、実に１０万基もの古墳が造られました。とくに、前方後円墳と呼ばれる古墳は、首長のお墓ですが、同時にヤマト王権と地方豪族の結びつきを示すためのものでした。

この時代、各地で海や山、河川や大岩などの自然にカミがやどると信じられ、災害から村や田畠を守るためにも、神マツリが行われました。また、王は亡くなると、カミ（＝祖霊）となり、クニの民を守る存在になりました。それを物語るように、古墳にはしばしば、カミに奉げれたものと同じ、石製模造品や宝器類が副葬されています。

足立区伊興遺跡出土
子持勾玉・鏡
（足立区教育委員会蔵）

古代びとの祈りとマツリ

古墳時代

● 展示ケース３　川辺のマツリ/山間のマツリ

[足立区伊興遺跡]

荒川と中川に挟まれた東京低地の一角にある5世紀頃の祭祀遺跡で、銅鏡や子持勾玉をはじめ、豊富な石製模造品、土製模造鏡、土器などが見つかっています。

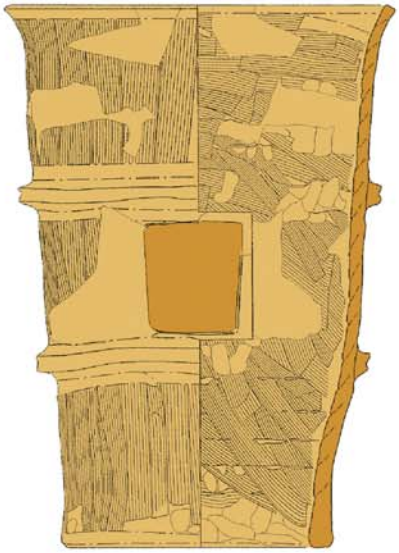
右・下の写真は、伊興遺跡での遺物の出土状況です。土器は祭祀に使用された後、このように穴の中に一括埋められ、再び使われることはありませんでした。

[町田市多摩ニュータウン№243遺跡]

多摩丘陵の西南端の山間のムラでも、川べりから朱塗りの土器や手捏ねの土器などが出土しました。祭祀用の道具は、6世紀後半からしだいに石製のものから土製のものへと変化します。より広範に神マツリが広まったことを示します。

上・左：伊興遺跡の祭祀遺物出土状況
（写真：足立区教育委員会）

伊興遺跡出土 須恵器
（足立区教育委員会蔵）



狛江市土屋塚古墳出土円筒埴輪
（狛江市教育委員会蔵）

● 展示ケース４　王のマツリ

[狛江市土屋塚古墳]

多摩川の中流域の左岸には、5世紀から6世紀にかけて、100基前後の狛江古墳群が形成されています。そのひとつ、土屋塚古墳は直径３５ｍほどの造出付円墳です。発掘調査により、墳丘に円筒埴輪を多くめぐらす古墳であることが判明しました。造出し部では、亡き首長のための墓前祭祀が盛大にとり行われことでしょう。

円筒埴輪の特徴から、5世紀中頃の古墳であり、埴輪には方形の透孔があり、群馬県（上毛野）の大首長墓である大田天神山古墳と共通することから、土屋塚古墳の主が遠く、上毛野の王と関係をもっていたことが推測されています。

「王のマツリ」には、もうひとつの政治的な意味がかくされていたことが、新たに考古学的な発掘調査でわかってきたのです。

狛江市土屋塚古墳
（写真：狛江市教育委員会）

東京都立埋蔵文化財調査センター　平成26年度企画展示

展示解説シート③　平安時代

古代びとの祈りとマツリ

● 中央展示　マツリの情景

官人（神宜官）が湧水から流れ出る清流のほとりでマツリをつかさどっている情景です。祭壇が設けられ、神に捧げる食物やお酒が供えられました。豊かさを願う文字を書いた土器①や木簡、豊作を願うための鳥形、治水を願う掛矢②や下駄・櫛などを清流に沈めて神に捧げるマツリを行いました。国や地域の繁栄を祈願したり、疫病、戦いなどの災いを避けることを祈りました。

日野市No.16遺跡出土の木簡
（日野市教育委員会 蔵）
［大」を重ねた墨書が読み取れる

日野市No.16遺跡出土の鳥形
（日野市教育委員会 蔵）
田や畠の豊作の神の使いとされている

日野市No.16遺跡出土の櫛
（日野市教育委員会 蔵）
魂の宿る頭を飾る物として大事にされ、各地の祭祀遺跡で出土する

古代における官のマツリとは？

古代中国の制度を倣った日本の律令制は地方統治と支配による中央集権体制を強めていきました。その頃の国の制度を記した「延喜式」に基づき、官人によりつかさどられた祭祀が、古代の地方官衙の周辺でも行われるようになりました。

日本各地で河川、湧水の流路から祭祀遺物が出土する遺跡が増え、墨書土器、斎串、木製の形代、刻印された木皿などの都の祭祀遺跡と共通する物が出土するため、地方においても中央と同じような祭祀が行われていたと考えられています。

古代において、清水が湧き出る所は力が生まれる場所として神聖視されてきました。清らかな水は穢れを流し、湧水の力は悪霊を避け、邪霊を除くと考えられたために、水辺のマツリが盛んになりました。日野市No.16遺跡、多摩ニュータウンNo.107遺跡では湧水の周辺や流路の跡から、墨書土器、木簡、鳥形、櫛などの多くのマツリのための遺物が出土しました。

古代びとの祈りとマツリ

平安時代

● 展示ケース５・６　水辺のマツリ　日野台地と多摩丘陵の湧水祭祀

【日野市No.16遺跡】

多摩川と浅川に挟まれた日野台地の裾からは豊かな水が湧き出ています。日野市No.16遺跡では、そうした湧水の一つに近い流路跡から木簡、墨書土器、木製の鳥形、弓、掛矢、櫛、高歯下駄、斎串などが出土しました。

【八王子市多摩ニュータウンNo.107遺跡】

大栗川と大田川の合流点に挟まれた台地の下の流路跡から、木組みの導水施設が発見されました。周辺からは木簡を初め、皿・椀・杯・鞍・弓・櫛・鋤・木槽・叩き棒・曲物などの多種の木製品、墨書土器を含む大量の須恵器・土師器が出土しました。台地上には住居跡に加え複数の大型掘立柱建物跡も発見され、地方官衙（役所）との深い関係が窺われる遺跡です。

多摩ニュータウンNo.107遺跡の導水施設

材を井桁状に組んだ貯水部の中心から、大量の木製品、土器などが出土した

日野市No.16遺跡出土の弓

弓は、祭祀の時に神に捧げる音を鳴らすためにも使われた

（写真：日野市教育委員会）

カマド構築の祭祀　―多摩ニュータウンNo.436遺跡―

住居のカマドを構築する際、供物などを納めた小甕をカマドの底に埋めていた

● 展示ケース6　カマドのマツリ

古代の国の制度「延喜式」の中には、竈(カマド)神に関する記述もあります。竈神は、古代中国では人の生死、家の繁栄に関わる神であり、そうした思想が日本にも伝わってきたのです。竈神は家を守る神のうちでも中心の神であり、時には火災などの祟りをもたらすとされ、恐れ敬われました。

古代の住居跡の発掘すると、カマドの廃絶時、あるいは新しくカマドを設けるときに祭祀的な供献を行った跡が発見されることがあります。八王子市多摩ニュータウンNo.436遺跡、八王子市多摩ニュータウンNo.512遺跡の例は、そうしたカマド祭祀の様子をよく表しています。

カマド廃絶の祭祀　―多摩ニュータウンNo.512遺跡―

住居のカマドを廃棄する際、カマドの中央に供物を入れた坏を釘で留めた台座に乗せて置いた